全カリ Newsletter No. 28
2010.10.1
立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

全カリ部長に就任して

青木　康（全学共通カリキュラム運営センター部長／文学部教授）

2010年4月に第7代全学共通カリキュラム運営センター部長に就任した青木康です。どうぞよろしくお願いいたします。

全学共通カリキュラム運営センターが1994年12月1日に誕生して、満16年になろうとしています。全カリ運営センターが誕生した時、新座キャンパスには学部はなく、正課教育については「各学部1年次週1日利用」と呼ばれた変則的な利用がなされているだけでした。その後、新座キャンパスにも3つの学部が設けられました。当時と較べて今では、立教大学全体で学部数はちょうど2倍に、学生数は約1.5倍に増加しています。このように立教大学が目覚ましくも目まぐるしく変化を続ける中で、全カリの将来を考えるにあたってぜひ覚えておきたい大切な歴史が、過去の帳の奥に隠されてしまっているように感じています。

私は文学部史学科の教員で、18世紀イギリスの歴史を専門にしています。それでひょっとすると、歴史というものへのこだわりが、そもそも他の人たちよりも強いのかもしれません。また、センター開設を準備した「全学共通カリキュラム運営センター準備委員会」の委員に始まって、センターの学部選出の運営委員、特別教務委員、総合教育科目の専門委員、英語教育研究室員、副部長、現在の部長まで、長年に渡って色々な立場で全カリ運営センターに関わってきたために、そうした全カリの歴史への思いが人一倍強いということもあるのでしょう。全カリ部長に就任して、この「ニュースレター」に全カリへの思いを自由に書く機会を与えられたので、はや十数年になろうとする全カリの歴史から私が感じているところを述べさせていただきたいと思います。

前置きが長くなってしまいましたが、全カリの歴史で私がもっとも強く感じるのは、全カリはその誕生以来数多くの課題に取り組んできましたが、それらは決して簡単なものではなかったということです。いわゆる半期制に移行すること、言語教育を担当する有期制教員（現在の教育講師）の制度を導入すること、初習言語の選択について学生の希望を100パーセント満たすようにすることなどはいずれも大胆な発想の転換と学内制度の変更をともなわなければ達成できないことがらでした。現在では当然のことのように感じられるかもしれませんが、最初の生みの苦しみは小さくなかったのです。しかし、全カリは、関係者の献身的な努力と、総長以下の全学教職員の協力を得て、大きいと思われた障害を着実に乗り越えて、当初の計画を実現することができました。

総合Ｂという複数教員の協働に主眼をおいた科目の設計と展開も、全カリの創設期に力をいれて取り組んだことのひとつでした。最初は、予定のコマ数を維持できるのかという心配すらありましたが、無事開くことができ、その数年後には、企画立案に事務部局が大きな役割を果たす制度を組み入れ、現在では、総合Ｂは、全カリ総合教育科目の中でも評価の高い科目として定着しています。

2010年度、全カリの言語教育は新しい段階に入り、この4月から言語副専攻や全学生必修・少人数クラスの「英語ディスカッション」が開始されました。これらもその実現までにはいろいろな困難があったのですが、今年度順調に立ち上がっています。総合教育科目では、2012年度を期して大幅なカリキュラム改革を準備中です。具体的な中身については、別の機会にご紹介することとして、ここでは、全カリの総合教育科目構想・運営チームが中心になって、新しいカリキュラムを策定する作業が熱心に進められていることだけをご報告しておきます。今回のカリキュラム改革では、展開される総合教育科目のラインナップが大幅に変わることになりますが、それだけでなく、各学部や教務部など他部局の協力も得て、全カリ総合教育の枠組み自体に新たな工夫を持ち込もうとしています。それだけに、実現までには慎重な検討を要する事項も少なくなく、2012年度に新カリキュラムを実施するには、遅滞は許されないという緊張感のなかで、全カリ運営センターは準備を進めています。このような状況にある今日、私たちは、数々の困難に直面し、それを乗り越えて成果をあげてきた十数年間の全カリの歴史に目を向けることで、勇気と自信をもって新たな改革に進んでいくことができるのではないかと思っています。

2012年度総合カリキュラム改革推進にむけてのアジ演説のようになってしまいましたが、実際、全カリの歴史は、改革に取り組もうとする者を励ますエピソードに満ちていると思います。多くの方々が全カリの歴史にも関心をもっていただくことをお願いして、部長就任のご挨拶とさせていただきます。

目　次

全カリ部長に就任して …… 青木　康（1）
就任半年を過ぎてのごあいさつ …… 藤原　新（2）
2010年度言語新カリキュラムの特徴 …… 谷野　典之（3）
教養は遠きにありて想うもの―タコ七変化― …… 平野　隆文（4）
大学教育学会第32回大会参加報告 …… 林　英明（5）
2010年度全学共通カリキュラム運営センター　名簿 …… （6）

就任半年を過ぎてのごあいさつ

藤 原　新（全学共通カリキュラム運営センター副部長／経済学部准教授）

この４月から全カリ副部長となりました藤原と申します。所属は経済学部です。全カリの「副部長」というのは2009年度からの全カリの組織改革に伴ってできた役職で、全カリ部長を補佐するとともに、全カリ全体の教務事項を担当するということになっています。

私は1999年度から2001年度までの３年間、全カリ総合部会の専門委員（この役職は組織改革に伴ってなくなりました）をしていたことがありますから、全カリの運営に直接かかわるのはそれ以来、ほぼ10年ぶりということになります。

ご存じの通り、全カリは言語教育科目、総合教育科目を合わせて数千コマの授業があり、内容も千差万別、多種多様です。このような全カリですから、先生方、学生諸君から日々持ち込まれる問題も千差万別、多種多様。教務にかかわる事項に限っても定型のない問題がどんどん発生します。日々生じる問題にそのときどきで最適と思われる方策を考えるのですが、まだまだ慣れないことも多く、日々勉強の毎日です。

さて、こうした質・量ともに大きな科目群を抱える全カリ、現在の課題といっても、それこそ星の数ほどあるのでしょうが、なかでも私は「いろいろな場面における学部と全カリとの連携」がいまいちばん重要だと考えています。

現在、全カリの意思決定は全学部長がメンバーとなっている全カリ委員会で行われ、全学部の合意のもとで進んでいます。また、授業担当についても、主に言語科目を担当する異文化コミュニケーション学部、スポーツ科目を担当するスポーツウエルネス学科をはじめ、すべての学部の先生方が一定のルールで全カリの授業を担当しています。そうした意味では全カリを「全学で支える」体制は整っているように見えます。

ただ、私の申し上げる「いろいろな場面における連携」はそうした意味だけではありません。立教大学の教育が目指す「専門性に立った教養人」を育成するために、決められた科目を担当するという支え方にとどまらず、自分の専門領域にかんして専門外の学生に何を伝えるべきなのか、学部の違いを超えて立教大学の学生として何を学んでいってほしいのかということを考えて全カリのカリキュラムに活かしていく関わり方を一人ひとりの先生方にぜひお願いしたいのです。大学での教育の質が問われ、その大学で育てたい学生の具体像の提示が求められているいま、専門学部と全カリの間で、こういう授業を開講したい、こういう教育が必要だという相互の意思疎通を密にし、議論していくことがこれまでにもまして必要となっています。全カリのさまざまな問題について、各学部での議論をもとに各学部の教務担当者や、総合でいえば学部選出サポーターの方々にご意見をうかがうなど、学部と全カリのさまざまなレベルでの話し合いを日常的にしていくことがより重要なのではないかと考えています。

とくに言語教育科目においては、これまでも１年次の必修を終えた後、２年次以降の言語教育に学生をいかに導き入れ、効果的な教育を提供するかという議論がなされ、全カリに限ってみても、自由科目などにさまざまに工夫がされてきているのはご承知のとおりです。2010年度から初習言語の言語副専攻がはじまり、また2011年度からは英語でも言語副専攻がスタートします。この言語副専攻科目群をどのように魅力的なコースにしていくのか、あるいは４年間にわたる言語の教育効果をどう高めて行くのかといった検討も行っていかなければなりませんし、そこで培ったコミュニケーション能力を活かす力も育てなければなりません。

ここでのカギもまた、専門学部と全カリとの相互連携です。全カリでの言語科目と学部における専門分野での言語関係科目の両者をいかに組み合わせて、全体として４年間の言語教育をどう効果的に組み立てるかが問われています。

私が10年前に専門委員をしていたころの組織と比べていちばん違っていると感じるのは、以前なら各学部２名ずつの委員から構成された全カリ運営委員が組織改革に伴って改組され、全カリの運営に直接かかわる先生方の数がずいぶん少なくなったことです。このことは教員全体の負担軽減、機動的な運営といういい面も持っているのですが、反面、専門学部のなかで全カリを「自分の問題」と捉えてくださる先生方が少なくなってしまったのではとの危惧も持ちます。

立教の全カリは、これまで多くの成果を上げ、全国的にも注目されてきた教育システムですが、「全学で支える全カリ」という原則が実態の伴わないお題目になってしまったとき、間違いなく全カリ自身も実体を持たない抜け殻になります。ぜひすべての教職員が全カリを「自分の問題」と捉え、関わっていただけるようあらためてお願いするとともに、私たちもそうした機会を増やすよう、工夫し働きかけていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

2010年度言語新カリキュラムの特徴

谷野　典之（言語教育科目構想・運営チームリーダー／異文化コミュニケーション学部教授）

本学の全学共通カリキュラムがスタートしたのが1997年、13年前のことである。以来、言語科目は言語A英語8単位、日本語を含む言語Bが6単位（文学部のみ8単位）必修という大枠の中で、統一的なカリキュラム、コミュニカティブ・コースの設置など、立教独自の特色ある教育を実践してきた。その成果を踏まえて、より柔軟で発展性に富む新カリキュラムが、いよいよ今年度から始まっている。その特徴を紹介したい。

新カリキュラムの特徴は、まず必修科目を大幅にモデルチェンジすることにより、全学的に必修単位数を言語A英語を6単位、言語Bを4単位へとコンパクト化したこと。また、それと組み合わせて、必修科目修了後から卒業年次まで継続的に言語学習を発展させていける自由科目を充実させた点にある。言語A英語では、必修科目のなかに1クラス8人程度の英語ディスカッションを新設し、それ以外の英語プレゼンテーションや英語ライティングでも1クラス20名程度へと少人数化を進めている。つまり言語新カリキュラムは、

(1) 必修単位の縮小
(2) 継続学習カリキュラムの充実
(3) 少人数化

という3本の軸を持っていることになる。必修単位数が縮小されたにもかかわらず、言語教育科目全体の展開コマ数は大幅に増加している。新カリキュラムはまさに言語教育の充実を目指したものであることに注目していただきたい。

本学に入学した学生は、まず1年間にわたって必修科目として言語A英語を週3回、言語Bを週2回、集中的に学習することでその後の学習に必要な基礎力を充実させる。英語の場合には、入学時に全員に対してコンピュータを使ったプレイスメントテストを実施し、その結果をもとに能力別のクラス編成を行う。さらに前期末と後期末にも同様のテストを行うことにより、入学後の学力の伸びを測定し、学生個々人がそれぞれ自分の学力に見合った学習計画を立てられるようになっている。

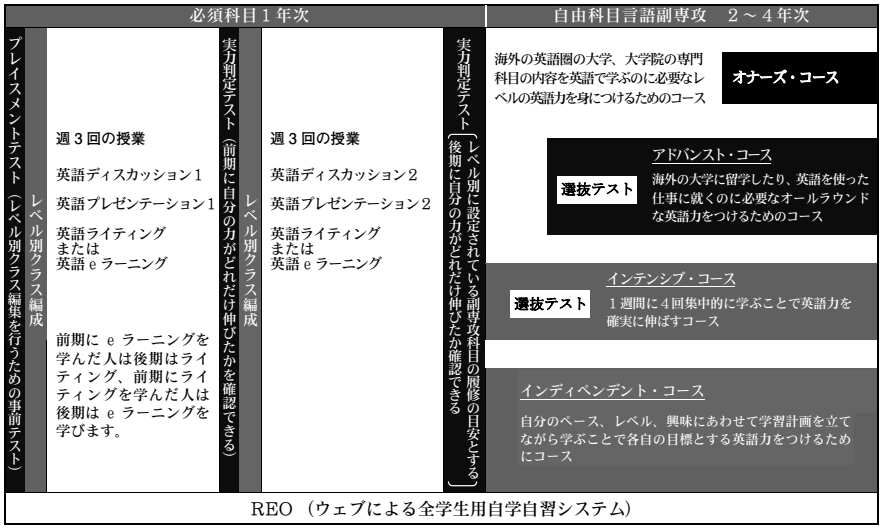
必修科目を修了した2年次以降は、自由科目として、各言語について継続的・段階的に学習できるプログラムが用意されている。国際化が進む現在、母語のほかに複数の言語を習得する意義はますます高まってきている。新カリキュラムのなかでは、英語のほか、ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語の各科目に言語副専攻制度があり、指定の単位数を修得することで、言語副専攻修了証が与えられる。（図1英語履修チャート、図2言語B履修チャート参照）

これまで自由選択科目（2009年度以前入学者）として、英語・中国語・朝鮮語には夏期海外研修のプログラムがあったが、新カリキュラムではそれに加えてドイツ語・フランス語・スペイン語も海外研修プログラムが新設され、すでに好評のうちにその第一回目が実施されている。また言語学習と並行して、その言語圏の背景を学ぶ「～語圏の文化」「～語圏の社会」という科目が全カリ総合Aの中に設置され、それもまた言語副専攻プログラムの一部となっている。単に言語をスキルとして学ぶだけでなく、海外研修のなかで異文化を体験し、また講義科目によって文化や社会を学ぶことができるカリキュラムとなっているのである。留学生の言語科目履修についても、これまで留学生は言語Bとして日本語しか原則的に選択できなかったが、新カリキュラムでは一定の日本語の学力を備えていることを前提に、他の初習言語を選択することも可能となった。これによって留学生の言語学習についても、より選択の幅が広がったことになる。

そうしたいわゆる外国語科目のほかに、言語新カリキュラムでは新たに日本手話を自由科目としてスタートさせている。日本手話は、ろう者の母語であり、日本語とは全く異なる文法体系を持った独自の言語である。それを学ぶことは外国語を学ぶことと同様に異文化理解の大きな扉を開くことにつながるはずである。

このように、2010年度言語新カリキュラムは、これまで13年間の全カリ教育の実践を踏まえ、より発展性のある充実した内容をもって出発したところである。このカリキュラムによって学ぶ学生諸君の今後に大いに期待したいと思う。

【図1　英語履修チャート】



【図2　言語B履修チャート】　＊ 日本語は含まない

		1年次		2～4年次			
		必修科目		自由科目　言語副専攻（必修科目終了後の継続的・積極的な言語学習制度）			
				基礎科目		コア科目	
ドイツ語 フランス語 スペイン語 中国語 朝鮮語 ロシア語	スキル科目	～語基礎1	～語基礎2	～語中級1	～語中級2	上級～語コミュニケーション1	上級～語コミュニケーション2
						上級～語ライティング1	上級～語ライティング2
				～語スタンダード1	～語スタンダード3	上級～語リスニングリーディング1	上級～語リスニングリーディング2
				～語スタンダード2	～語スタンダード4	上級～語演習1	上級～語演習2
		～語海外言語文化研修（中級）				～語海外言語文化研修（上級）	
	関連科目	～語圏の文化、～語圏の社会、～語情報処理、学部展開科目（予定）など					

教養は遠きにありて想うもの —タコ七変化—

平野　隆文（総合教育科目構想・運営チームリーダー／文学部教授）

全学共通カリキュラム総合教育科目構想・運営チームとかいう、日本語を学んでいる外国人なら絶対に覚える必要のない長ったらしい名称の「会議体＝組織体」のチアリーダー、もといチームリーダーに祭り上げられてしまった文学部の平野隆文と申します。まだ前任校から移籍して 2 年半程度で、右も左も分からないのに、ただ腹と声と顔と態度がデカイという理由だけで、こんな重責を担わされ、毎晩涙で枕を濡らしているのでございます。フランス・ルネサンス文学が専門ということになっておりますが、実を言うと魔女や黒魔術やサタンに関する研究の方が得意でして、家では毎晩大窯の中に色々な虫やタコやカバなんぞを入れまして、真っ黒い錬金術を実践など致しておるのでございます。錬金術と申しましたが、2012 年度より予定されている全カリ総合科目も、私がメンバーの皆さんと一緒に囲んでいる大鍋の中に放り込んで、グツグツと煮込んでおりますが、今のところ、金色に輝くタマが出来上がったわけではございません。ただ、「立教」、「総合」、「領域」（全て仮称）という多少は見栄えのする珠が三つほど結晶しつつあります。官僚的な説明は不得手でございますので、私なりの表現でご説明申し上げますと、「立教」というのは煉瓦色と緑色が混ざったような鮮やかな珠でして、見かけはかなり綺麗でございます。要するに、この珠を撫でていますと、「蔦の絡まるチャペル」に集う人たちが、大学に煉瓦色が似合うという感性は如何にして醸成されたか、などという高級な問題について論じたくなったりするわけです（因みに、ペギー葉山さんは青学出身です）。「総合」というのは数百色に染まった勾玉のような外観をしていて、これには、撫でている内に、突然、あらゆる分野の新書を猛烈に読みたくなったり、いきなりダッシュして「平野のバカ野郎」などと怒鳴りつつストレスを発散したくなったりするような効果があるようです。

3 つ目の「領域」というのは、10 色に塗り分けられている珠でございますが、この珠を立教大学の学生諸君がいじくり回すと、突然、頭のスィッチが全く別のチャンネルへと切り替わるという効果がございます。何と申しますか、他の学部の講義に出ている綺麗なあの娘が気になったり、他の学部の演習でエスペラント語を読んでいるイケメン君と、無性にお話がしたくなったりするようです。ただし、この珠を作る際には、かなり異質な成分が互いにくっつくよう、大鍋の中に強烈なセメダインを入れたせいもありまして、誰からも好かれているわけではないようです。特に、蛸の住処がお好きな方には嫌われております。逆に、同じタコでも凧の好きな方には好かれているようです。

昨晩見た夢ですが、この 10 色から成る珠が突然 10 の部分に分解し、それぞれが本当に蛸に変身した後、海底の「クローズド・ツボ」なる本籍地を棄ててパスポートを手にし、ズンズンズンと水面に浮上し、さらに大空にドッカーンと舞い上がってササラ型の凧になってしまう夢を見たのでした。今まで真っ暗な海底にいた蛸が、突然、「天の風」に身を任せつつ、広大な景色を楽しめる凧になれたのですから、どのタコも喜んでいるかと思いきや、中には「ワシは子宮回帰願望の強い蛸やさかい」などと愚痴りながら、海の底へと急降下していった者もいたようです。一方、舞い続けている凧の方は、「なーるほど、視界が開けると世界の複数性や異質性がよく分かるざんすね」などと感心していました。変な連中です。

その後、何故か私自身が、蛸＝凧に変身していて、「オクタプス・カイト共和国」内の、ある役所らしき場所で、本籍地の「ブルターニュ沖タッコツッボスッキン海域・海底 500 メートル 49 番地 13、パークポット・オクタプス・0 号室」はそのままでよいが、住民票を先ずは「パリ・コレージュ・ド・フランス上空海抜 1234 メートル 5 番地 6、ワイドインテリジェンス 007 号室」に変更したい旨お願いすると、茹で蛸みたいに真っ赤な顔をした二日酔いのタコ役人さまが、「本当によろしいんですか、後悔なさいませんね ? あの『ワイドインテリジェンス』という凧用の高級マンションには、様々な分野で活躍してきた我が国の知性が、毎晩のように領域横断的な議論をしていますから、ついていけない住人が、ストレスから自分の足を食べ出したりするものですからね、よ～く考えてから出直した方がいいですよ」と、「蛸足配当」を知悉しているかのような忠告をしてくれたのでした。

ここで私は目を覚ましたのです。フロイト博士に、この夢の真意を伺ってみたいものです。どうも教養がないので、教養の何たるかを偉そうに論ずる資格はありません。ただ、偉い方々の発言に耳を澄ますと多少は輪郭線が見えてくるかもしれません、「教養とは全てを忘れた後もなお自分の内に残っているもの」、「教養とは、自分の置かれた位置と状況を測りうる能力」、「よく詰まった頭よりはよく出来た頭を」、「文明は文明の再生産のための教育を施す。しかし、教養は時として、文明の根拠すら揺るがす」等々。最後の一文は、フランスの作家ミシェル・トゥルニエの主張を私なりに要約したものですが、確かに、学校教育だけでは満足できない知的渇望に駆られた者が、文明に脅威を与えるまでに成長することがありえます。トゥルニエは汎神論的認識を唱えたジョルダーノ・ブルーノが 1600 年に火炙りにされた例を提示していました。広大無辺にして深遠なる教養の世界は、もしかしたら、学校制度を含む社会や文明の存立基盤に対して、実は破壊的な力を発揮することがあるのではないでしょうか。

だとしたら、我々は、ではなく、少なくとも私のような凡人教師は、やはり住民票を移すのはやめて、海底の狭い壺に戻るべきかもしれません。「教養とは爆発だ！」というのがもし本当なら、専門という安全圏を確保しそこに安住する方が、ずっと楽に生きられます。だから、2012 年度の全カリ総合科目の改革の音頭を、私ごとき、無能かつ安全志向の人間に取らせるのは、正しい選択とは言いがたいのではありませぬか。自分の体型や性格を見つめ直してみると、私に最も似ているのは、借金のやりくりに苦労しながら、小さな印刷工場を必死で経営し、隣家の「おいちゃん」の土間に毎日のように上がり込んで来ては、「バカだねー、ホントにあいつはバカだねー」と寅さんのことをからかっているのも束の間、その寅さんが偶然旅先から帰ってきて、殴り合いの大喧嘩の末「覚えてろ」と吐き捨てて汚い自宅兼工場に引き返す、あのタコ社長以外にいませんから。

大学教育学会第 32 回大会参加報告

林　英 明（全学共通カリキュラム事務室／本学職員）

1．はじめに

2010 年 6 月 5 日から 6 日にかけて行われた、大学教育学会第 32 回大会に参加した。本学会は、1979 年 12 月「一般教育学会」として発足し、1997 年 6 月「大学教育学会」に改称。発足以来一貫して、現代の大学大衆化に伴う「大学教育研究」の開拓を志向し、かつ広範な大学教員が参加する「大学教員としての自己研究」活動（FD 型研究活動）をその中心にしてきている。大学教育改革に関して、いわゆる現代化を推し進めるとともに、本来的な人間形成機能の再生をめざしている。

第 32 回大会である今回は、総合テーマを「大学の存在意義（レゾンデートル）」とし、大学の存在が、地域振興をはじめ、社会に対しどのような役割と影響をもたらし、今後どのような存在感を期待されているかということが主な議論の対象であった。こうした大学の存在意義を巡る議論は、都市型大学よりも、地方においてより重要かつ緊急度が高い問題であるという印象を受けた。しかしながら、今回大学の存在意義のキーワードとして示された「地域性」を「独自性」と読み替えれば、都市型大学である本学も、地方大学の取り組みを参考にすべき点が少なくないのではないかと感じた。

本報告では、特に 2 日目のラウンドテーブルで議論された「共通教育のデザインとマネジメント」について、本学を含めた 4 大学の事例と取り組みの比較から、共通教育における大学間に共通する課題と、相違点に着目しながら、以下に報告したい。

2．ラウンドテーブル「共通教育のデザインとマネジメント」

共通教育カリキュラムに関して、4 つの大学の事例が紹介され、来年度に大学教育学会が実施を予定している共通教育に関する全国実態調査の参考とすることが確認された。

まずは文教大学の事例として、「教養教育の変容と今後の課題」というテーマで、1991 年の大学設置基準の大綱化以降共通教育のカリキュラムがいかに変容してきたかについて報告があった。大綱化以後、一般教養部の解体により、共通教育のカリキュラム編成は教養課程と専門課程の「2 階建」から「くさび型」へ変化したと言われていたが、現在はさらにキャリア教育や導入教育等によって多様化しており、「モザイク型」に変容したと言える。また、教養教育担当者が専門教育にシフトしており、共通教育を担う後継者の育成や継続性の確保が課題として挙げられた。

次に東京農工大学から、「理工系大学における共通教育」というテーマで専門教育を重視する科学技術系大学の視点から、共通教育のマネジメントについて報告があった。東京農工大学では、2010 年度からマネジメント力を強化するために「全学共通教育機構」を設置し、大学教育センター長を機構長として、全教員の科目登録による「全学出動体制」、科目長を中心とした科目群制度を設け、共通教育における PDCA サイクルの構築を目指しているとのことであった。しかしながら、共通教育の担当者不足や共通教育と専門教育の接続の困難さが課題とのことである。

次に報告のあった県立広島大学では、2005 年に 3 大学を 4 学部 11 学科に統合再編した大学で、3 キャンパスが 50～80km 離れた立地であることから、主に遠隔講義システムにより、共通教育を実施しているとのことであった。課題としては、教養教育の定義、教養教育と専門教育の協働、学部間の意識格差、教員組織の編成と運営、カリキュラム改革などが挙げられ、全学的 FD の取り組みが必要であることが報告された。

最後に本学から、全学共通カリキュラム運営センターの青木部長より、「立教大学全学共通カリキュラムの現在」というテーマで報告があった。本学の全カリでは、学士課程の教育目的である、「専門性に立つ教養人の育成」という言葉にもあるとおり、歴史的にも教養教育を重視してきた。設置基準の大綱化以降、全カリ運営センターを発足させて、本センターは学部と同等の組織となっており、専任教員は学部とともに全カリ教員であるというルールが存在する。また、全カリ部長は部長会の正式メンバーとなっている。2009 年度より新体制が敷かれ、学部長が「全カリ委員会」の構成メンバーになることにより、必要に応じて革新的かつ枠にとらわれない議論が可能な体制となった。新体制の課題として、学部と全カリ運営センターの意思疎通が挙げられた。

その後、上記の各大学からの報告を受けて意見交換が行われた。共通教育には、カリキュラム編成のリーダーシップをとれる組織が必要であるとか、デザイン（単位数の増減など）は数値化できるが、マネジメント（実施体制、責任体制）はデータ化になじまないため、好事例の収集が望ましいといった意見があった。また、学部と共通教育の関係性、特に人事権について課題が多く、担当する教員にもインセンティブが必要といった意見もあった。

3．感想

本学会に参加して、設置基準の大綱化に伴う一般教養部の解体など共通教育に関する歴史的経緯と各大学に共通する課題について認識することができた。共通教育は学士課程教育全体のデザインと切り離すことができないが、共通教育と学部ごとの専門教育との接続・連携については、他の大学も共通した課題として捕えていることを理解した。また、共通教育に関しては、特にマネジメント（運営組織）の重要性を確認した。他大学では共通教育を支える全学的な組織が未発達であったり、権限が限定的な大学もあり、共通教育のマネジメントの難しさを知った。

こうした点から、本学の全学共通カリキュラム運営センターが先駆的な取り組みを行っていることをあらためて認識した。また、全学で支える全カリの継続性を維持するため、FD 活動のさらなる推進と共に教員と職員の協働が非常に重要であると感じた。

２０１０年度　全学共通カリキュラム運営センター 名簿

2010年9月現在

＜全カリ委員会＞

役職名	氏　名	所属		
部　長	青木　　康	文	史	
副部長	藤原　　新	経	済	
チーム	谷野　典之	異	異	言語チーム
リーダー	平野　隆文	文	文仏	総合チーム
運営センター	加藤　　睦	文	文日	文学部長
委員	郭　　洋春	経	済	経済学部長
	佐藤　文広	理	数	理学部長
	間々田孝夫	社	現	社会学部長
	角　紀代恵	法	国ビ	法学部長
	村上　和夫	観	交	観光学部長
	松尾　哲矢	福	ス	コミュニティ福祉学部長
	山口　和範	営	営	経営学部長
	神田　久男	現	心	現代心理学部長
	一ノ瀬和夫	異	異	異文化コミュニケーション学部長
	家城　和夫	理	物	教務部長

＜言語教育科目構想・運営チーム＞

役職名	氏　名	所属		
リーダー	谷野　典之	異	異	
メンバー	高橋　里美	異	異	英語教育研究室主任
	浜崎　桂子	異	異	ドイツ語教育研究室主任
	小倉　和子	異	異	フランス語教育研究室主任
	佐藤　邦彦	異	異	スペイン語教育研究室主任
	細井　尚子	異	異	中国語教育研究室主任
	石坂　浩一	異	異	諸言語教育研究室主任
	池田　伸子	異	異	日本語教育研究室主任

＜総合教育科目構想・運営チーム＞

役職名	氏　名	所属		
リーダー	平野　隆文	文	文仏	
メンバー	下地　秀樹	講	教	
	岩崎　俊夫	経	済	
	上田　恵介	理	生	
	小池　　靖	社	現	
	沼澤　秀雄	福	ス	

＜言語教育研究室＞

研究室名		氏　名	所属	
英語	主任	高橋　里美	異	異
		Allum, Paul H.	異	異
		Caprio, Mark E.	異	異
		Cousins, Steven E.	異	異
		Cunningham, Paul A.	異	異
		藤田　　保	異	異
		Glick, Christopher	異	異
		川崎　晶子	異	異
		小林　悦雄	異	異
		森　　聡美	異	異
		師岡　淳也	異	異
		灘光　洋子	異	異
		中谷　　一	異	異
		実松　克義	異	異
		高山　一郎	異	異
		鳥飼慎一郎	異	異
		山田久美子	異	異
		山口まり子	異	異
		平賀　正子	異	異
ドイツ語	主任	浜崎　桂子	異	異
		新野　守広	異	異
フランス語	主任	小倉　和子	異	異
		石川　文也	異	異
スペイン語	主任	佐藤　邦彦	異	異
中国語	主任	細井　尚子	異	異
		谷野　典之	異	異
		呉　　悦	異	異
諸言語	主任	石坂　浩一	異	異
		イ　ヒャンジン	異	異
		谷野　典之	異	異
日本語	主任	池田　伸子	異	異
		田中　　望	異	異

＜総合チームサポーター＞

	氏　名	所属		グループ＊
学部選出	河野　哲也	文	教	人文
	中島　俊克	経	済	社会
	原田　知広	理	物	自然・情報
	村瀬　洋一	社	社	社会
	早川　吉尚	法	国ビ	社会
	佐藤　大祐	観	交	社会
	原田　晃樹	福	政	社会
	秋野　晶二	営	営	社会
	宇野　邦一	現	映	人文
	星野　宏美	異	異	人文
総長任命	木田　祐司	理	数	自然･情報
	松下　信之	理	化	自然･情報
	山田　康之	理	生	自然･情報
	長島　　忍	理	数	自然･情報
	林　みどり	文	文文	人文
	大石　和男	福	ス	スポーツ人間
	Davis, Scott T.	営	国	社会
	大石　幸二	現	心	スポーツ人間
	石坂　浩一	異	異	人文

＊サポートグループ

- 人文学系サポートグループ
- 社会科学系サポートグループ
- 自然・情報科学系サポートグループ
- スポーツ人間科学系サポートグループ

全カリニュースレター　No.28
印　刷　2010.10.1　発　行　2010.10.1
発行人　青木　康
編集人　浜崎　桂子、岩崎　俊夫
発行所　立教大学
全学共通カリキュラム運営センター
印　刷　神谷印刷株式会社